

報



會

會 岳 山 本 日

79

月 九 年 三 十 和 昭

時局と登山

吉澤 一郎

國民體位の向上とか、國民精神の作興とか近頃非常時局に相應しい言葉が色々な場合に使はれ、利用せられてゐる。滿洲事變の時は夫程でもなかつたが支那やその他の馬鹿者共を相手とする様になつて殊に夫が目立つて來た。滿洲事變當時は私達がリュック・サックでも擔いで山杯へ出掛けると、此の非常時に登山杯とは、と云つた調子で白眼視され、自分では大いに理屈に適つた道樂であるとは思ひ乍らも大勢には抗し得ず新宿を出る時でも上野を發つ時でも多少の引け目を感じてゐたものであつたが、近頃は全く之と反對な傾向になつて、出掛ける方も大威張りだし、見送る方も頼母し相な見送り方で、召集をうけた兵隊さんと同車してもブンなぐられる心配は絶對になつた。洵に有難い御時世になつたものである。所で私が會報の第一頁にこんな事を書き出したのは何も自分達の山行きが氣持の上で樂になつたといふ事だけを云ひ度いが爲ではない。國民體位の向上を叫ばれて登山といふものが時流に乗つたからと云つて猶も杓子も山へ行き體位の向上はそつち退けで詰らない遭難事件を惹き起し、自分達の生命を失ふのは自業自得としても世間様を騒

がし延びては國家に對して大損害を與へる様な不仕末をし、かす人達の多くなつた事を嘆かふといふのである。話にもならない遭難事件が起きるのは何も今年に限つた譯ではないが年々増えこそすれ決して減らないのが山での遭難である。色々な機會に色々な人が山での危険を書きもし話しもしてゐる、然し其等の話や書きものを讀む人は或る一定の範圍内の人達だけに限られてゐる。其れ以外の人は、山の危険の何たるかも知らず計畫をたてると其の儘殆ど何の準備もなしに出掛けて了ふ、人夫さへ雇へば、案内さへ頼めば、決して心配はない位に思つて山へ這入る、而も一方案内組合では、少し經驗ある者なら案内なしでも通れる様な山道さへ知らない人間まで、堂々と案内者で御座いと何も知らない登山隊に附けて出す。彼は唯急を最寄りの小屋に漸くの事で告げるだけの能しかなくとも天氣さへ良ければ山の名案内者をして一行を迷所へ引張り上げる、之では遭難事件の起きない方が不思議である。北アルプス方面では山の案内者となる前に何か簡單ではあるが試験をしないとの事である、他の方面では之だけの事さへもやらずに案内者名簿に登録して了ふらしい。

私は敢えて云ひ度い、登山を以て非常時に最も適した運動と認めた厚生省のみならず内務省でも文部省でも陸軍省でも或は又漁父の利(?)を占めて居る鐵道省でも兎に角多少でも此の問題に關係ある所が一致協力して、登山の凡ゆる部門に亘つて責任ある關心を持ち、統制でも監督でも何でもいゝから——勿論之には範圍と限度がある。厚生省だか強制省だか解らない様な事をやつて貰つては困る——役人的な呑氣さを棄て、積極的に登山全體のヨリ、良き發展の爲めに協力して欲しい。

役人の中にも勿論、その道の大家は多い、然しこゝろいふ事は矢張り役人だけでは持が明かないものである、他の經濟問題にした所が民間の有識者をその相談相手として研究してゐる位なのであるから、この山の方面にあつても各方面の知識を集めて大いに調査研究をする必要があると思ふ。

山で死ぬ様な人間は勝手に死なして置けばいゝぢやないか、と云つた文部大臣があつた相だが、全くその通りと云つて了へば夫までの話で、一面の眞理は認めてもそれで解決がついたとは誰も思ふ者はあるまひ。矢張り其れ以上に一步も二歩も突き進んで災禍の防止は云ふ迄もなく體位の向上とか精神の作興とかいふ點にまでこのスポーツを持つて行く事こそ責任ある地位にある人々の考究しなければならぬ問題ではないか。

實際山の危険といふものを總ゆる人々に徹底させる事は困難であるかも知れない、然し今までの統計でだ

けでもどういふ位置(詰り學生とか商人とか工場員とかいふ)にある人が一番死ななくともいゝ所て死んでゐるかといふ事が解ると思ふ、缺陷はそゝいふ所にあるのだ、第一の急務はそゝいふ所にある人々へ山を徹底させる事にあると思ふ。此の意味から云つても凡ゆる學校の校長先生位は、山の何ものたるかを充分知つてゐる貰ひ度いものだ、跡始末に狂奔するだけの餘裕があつたらその前に山の書一冊を讀む位は何でもないではないか。

東京の海軍經理學校では一年を通じて時々山へ行つてゐる。校長の理解のあるのは勿論であるが教官の池田少佐は山行の都度日本山岳會の事務所にやつて來られ實に熱心に私達の様な若僧の説明を聴いて行かれる。本當に責任を以て學生の爲めを思ふなら此の位の事は當然だろう、然し一般人にはその當然な事が出來ないのだ。お偉い方々が、いくら上ツツラの御談議に浮身を窶してゐても根本を忘れた宣傳許りでは決して所期の目的は達せられるものではない。然し私達は往々にして、山を知つて居る者から見たら全く見當違ひの事を仕でかした様な人間にも表彰状を與へるお役人を見る。私達はまづさういふ人達の頭からして改造して行かなければならぬのかも知れない。

X X X

ダック・バンガローの事ども

II 湯 浅 巖

野菜類は町では何んでも得られるが、山のバンガローに行くにジャガイモ、トウモロコシの他には手に入れる事が出来ないものと覚悟せねばならない。ケナ(豆の一種)、玉葱、ウリを或るバンガローで喰ふ事が出来たが、野菜の不自由さは何處の山に行つても共通の悩みである。

調味料は普通山地で持つて行くものを用意すれば充分だ。内地から持参したものは角砂糖と食鹽、固形醬油、ソース位なものであるが、調味料は悪々内地から持つて行かなくてもアルモラ級の都會では立派な食料品屋から購入出来る。山に入るとグールと呼ばれる黒い固りの下等な砂糖チベット方面で採れる岩鹽、ミルチヤ等があるが、我々には満足出来るものではない。調味料、菓子類だけは必ず山の都會で用意する必要がある。

果物も山中の一ツケ所でバナナ、メロン、胡桃を口にしたが、少量の果物雖詰もなくはならないものである。底冷えのする夜、赤々となつたマントル・ピースを圍んで淡いランプの燈りのもとで、ゆつたりとパイプを啜へて過ぎし旅の出来事を追想し

たり、或は明日からのアドベンチャーを想像し乍ら飲む食後の紅茶の味はいつも乍らうまいものだ。紅茶の本場の薫高いダーゼリン・テイである。印度へ到着して以来、日に

數度飲む紅茶ではあるが何時、何處で飲んでもそのうまさにいや味を覺へる事はない。バンガローの旅でも食後は云ふ迄もなく、朝カンサマが「サーブ・チャ」と云つて運んで来る

暖かいブンと鼻をつく紅茶を乾き切つた咽喉に通す時の爽快さは今でも思ひ出すとグツと咽喉が鳴る。紅茶には減多に牛乳を入れないが、時々

まミルク入りの紅茶もいゝものだ。町では牛乳であるが、山奥に入ると小羊の乳となる。紅茶は印度人の常用するものであるが山奥の村人は餘

程金持でなくてはダーゼリン・テイは飲用出来ない。土人は多く、コウ、サと呼ばれる木の皮からとる下等なテイを飲んでゐる。或る處で奨められ

るまゝに口にあてたが、少しの香りもないどす黒い香茶といつた程度のもので咽喉には通らなかつた。紅茶づくめの中にもたまに飲む日本茶の滋味を決して忽がせに出来ない事を附記して置きたい。

食器類はカンサマの居ないバンガ

ローでも備付けてある。皿、コップ、スプーン、フォーク、鍋等チヨキダールに申込みば使用料を出して自由に使へる。我々は煮炊するアルミの鍋を卓子の上に置いて皆で突き合つて喰ひ、小皿は山で使用する爲の瀬戸引の皿を各自持つてゐてそれに分けて喰ふ程度の簡單なもので、備付け食器を借用した事はなかつた。

最後に同行する人夫の食事の事であるが、この事についてはサーブは何の心配もゐらない。彼等に一定の日當をやると、各自でサルカルバニ

や或は村人から食料を仕入れて自炊して喰ふのである。彼等が驚くべき簡單な食事で重い荷を背負ひ跟いて

來られるのは不思議な位だ。以上の様に食料は現地で購入出来る

食事は全部カンサマに任して置くのだから「サーブ」は食事に就いて何等の心使ひもいらす、悠々たる氣持で

その日その日を過す事が出来る。バンガローはこの様に何事も行届いてゐるので、夏期の避暑季節には珍らしいヒマラヤ山中の風物を訪ねて文明人の利用する者が非常に多い。

バンガローの旅を續けて氷河見物をするのもいゝが、雪嶺近い眺望の展けたバンガローに數日間の滞在生活をして悠々たる大自然を味ふのもいゝものだ。もう一度渡印する機会があれば、今度はゆつくりした豫定でバンガローの旅をして見たいと思つてゐる。黄昏時、爽やかな朝、奇麗なバンガローの前庭の芝生で、遠

く輝く雪山を眺めながら食事をしてゐると、自分の前に竿をぶつて角笛をならす古風な姿の牧童とともに軟かな頭鈴をならしながら幾十頭の羊の群れが現れた。それが彼方の家かどに消えてゆくと、何處からともな

山の名、山の地名(二)

白馬 耕

三 鹿島槍ヶ岳

二八九、七 信濃越中界

この山の略々東麓にあたる北安曇郡平村鹿島といふ部落名から鹿島をとり、その形貌から槍がとられ、こゝう名付けられたと見るのが順當であらうか。鹿島は隠れ里傳説をつたへる所で、この山の同じ東麓直下にはカクネザトと呼ぶ幽谷がある。

この山が以前に後立山と呼ばれたと云ふ根拠について、中島正文氏は「山岳」三十二年一號所載の「黒部奥山と奥山廻り役」において、古文書史料から推測され且つ斷定しておられる。そこでは主として、三州測量

間繪圖(文政四年)及び新川郡海岸分間繪圖(嘉永五年)をその立證材料に使はれてゐる。すなはち「以上に依つて古來使用された後立山なる名稱は鹿島槍ヶ岳に對して附せられたるものなることを斷定すると共に、

以南針ノ木峠までの峯々は、一括して後立山なる名稱に包含されて居た

く奇異な調律を持つた印度の唄が聞えてくる。こんな情景を想像してゐるともう自分の心は異境の空を馳け廻ぐる。

(一三、五、七、大阪宮田部隊にて)

と附言したのである……」と。

同誌の中に中島氏はこの山の異名について立山雄山神社の神官佐伯尚宜翁の談話を紹介され「鹿島槍ヶ岳は鹿島大嶽ともミカゲガ嶽とも云ふ其故は曉天には、旭日、鹿島大嶽の肩の邊より昇り、夕べともなれば立山の御影が長く大嶽に向つて引くよりミカゲガ嶽の名ありと幼時より教へられたり」と記し、しかしこの呼名は往時の上犬ヶ嶽と混同の恐れあるから暫くその結論は保留すると述べてある。

そこで高頭氏の「日本山嶽志」(明治三十九年二月發行)を見ると、後立山 越中下新川、上新川ノ二郡、信濃國北安曇郡ニ跨ル、登路未詳とあり、その補遺部には、後立山、下新川郡山崎村大字山崎ヨリ十里ニシテ其山頂ニ達スと記してある。こゝにいふ後立山が果して鹿島槍ヶ岳と合致するか疑問ではあるけれども、當項に入れ、當時におけるこの種、

山嶽志編纂の極めて困難であつたことを窺ふ材料としやう。

次にはこの山について他の呼名を記して見れば、「山岳」六年一號所載の「後立山連峰縦断記」に、鹿島槍ヶ嶽（日本風景論には鹿島鐘ヶ嶽と書せり）は今回縦断を試みたる後立山連峰の最秀點を成し、最近の測量に據れば海拔九千五百三十七尺（二千八百九十メートル）に達す、此山は大町邊にては鶴ヶ嶽と呼び或は略して單にツルともいふ、晩春山腹雪消えの部分、鶴に似たる形を顯す故なりと云ふ。又北城村にては背、競べと云ふ、山頂の二峰高峻を競ふが如き形ある爲めならん、山麓なる野口、大出邊にては鹿島槍ヶ嶽の名一般に用ゐられ居れり」と記し、尙山案内品右衛門兵三郎等は「鹿島の槍」と呼んで居つたことが述べてある。

此の一行は明治四十三年七月十九日に當山の頂上を極めて居り、之より以前、三枝威之介氏は單獨にて同四十二年八月五日同じ頂を踏査された（同上誌）。

れる。何れにしてしても、このやうな、山麓の人たちによる呼名の發生があり、それが或る時代に愛稱されたのは懐しいことだ。

ナンガ・パルバツト

全獨逸の國民的支持と燃ゆるが如き獨逸魂とを以て本年こそはとナンガに向つたパウアー隊も遂にヒマラヤ的な悪天候に阻まれて山頂攻撃を断念せる旨去る八月八日ミュンヘンの獨逸山岳會本部から發表された。エヴェレストは駄目でもナンガだけは、とは何人の頭にもあつた希望であつたに違ひない。然し乍らヒマラヤの巨峰は依然としてヒマラヤの巨峰であつた。吾々はパウアー達の敗退を悲しむものではあるが一九三四年及び一九三七年度の如き悲惨事を惹起しなかつた事、及びヴイリ一メルクル並びに忠實なるポーター、ゲイレイの死體の發見といふ最大收穫を齎し得た事に對して心から歡びの言葉を送り度いと思ふ。友邦獨逸の國民はヒマラヤの巨峰征服といふ事に對して、否、アルビニズムそのものに對して、英國に優るとも劣らぬ同情と理解を有してゐるらしい、洵に羨しき限りである、第五回の遠征がいつ又行はれるか今直ちに之を知るに由もないが之が決行の實現は今日までの彼等の熱意に徴しても瞭らかな事である。（前號にて遠征隊の入山徑路をスリナガル經由とせるは誤り）



佛國のヒマラヤ遠征費

T・F

會員の今西錦司氏から「日本でも一九三八年にヒマラヤ遠征の計畫が熟しつゝある。目的地がカラコルムヒマラヤであるから、一九三六年の佛蘭西遠征隊の經驗がきゝたい、殊に經費の點に付いての詳細が知りたい」といふ大意の手紙を受取つたのは昨年二月瑞西グリンデルワルド滞在中であつた。巴里に戻ると早速お馴染の山の小屋の主人に相談をかけたところ、遠征隊の留守を預つてゐたジ・シユス（月刊 Camping 誌主筆）に會ふがよからうとの話。シユス氏は快く會つてくれたが、遠征隊の財政的方面のことは、當のリーダー、アンリ・ド・スゴニーニユから聞いて貰ひたい、自分の口からは話し難いといふ。それでスゴニーニユ氏に面會したのだが、御當人も遠征費

用の詳細はコンフィデンシャルで話す譯にはゆかぬと固執するので、それ以上立入つて訊ねることも出来ず、たゞ遠征に關する經驗だの注意だのをきいて別れた。

このときの話にも中には参考にならうかと思はれる事項があるからいづれ簡単な報告をする積りでゐる。さて掲題の遠征費用だが、これは昨一九三七年六月刊行の報告書四十九頁に財源に關する數字が發表された。支出に關しては報告書中に何等言及する所がない。いま財源として擧げられたものを左に掲げてみる。

政府補助金 二七〇、〇〇〇法
公共機關補助金（巴里市、佛蘭西銀行、商業會議所）三四、一三〇
佛蘭西山岳會本部 七〇、〇〇〇
同上 巴里支部 五〇、〇〇〇
同上 地方支部 一〇、九〇三
一新開社契約金 一〇〇、〇〇〇
運動團體寄附金 一一、五九六
講演其他宣傳收入 五三、八八四
銀行會社寄附金 一〇七、三五〇
個人寄附金 一一三、二七〇
總計 八二一、一三三

右の總額を一九三六年春の爲替相場で邦貨に換算すると約十八萬六千圓ばかりになり、遠征隊のメンバー九名で一人當り二萬圓餘といふ計算になる。メンバーの個人的負擔は全然なかつたといふが、食料、裝備等は製造業者から無償或は破格の廉價を以て提供されたものが多く、無電

裝備は佛國陸軍の無償貸與、交通費も鐵道會社、汽船會社の好意によつて割引をして貰つたといふのであるから、隨分資金を費した遠征といふべきであらう。然しまた一方から見れば、英國や獨逸などゝ違ひ、佛蘭西から始めて送り出すヒマラヤ遠征隊とあつて、萬事遺憾なきを期した結果、金もかゝり又大袈裟過ぎるなどゝ批評もされたのであらう。

昨春右のスゴニーニユ氏に會つたときは、一九三八年に再びヒドン・ピータに向ふ心算と語つてゐたが、遂に實現の運びに至らず、今夏は會報前號にもあつたやうに米國の小規模な登攀隊がバルトロ水河を溯行するの幸運に恵まれてゐる。

これもその會談の折、日本から最初のヒマラヤ遠征隊を送り、ナンダコット頂に成功したと語つたところ、スゴニーニユ氏は幸先がよいと大層喜んでくれ、報告書六十一頁の脚註に「一九三六年十月東京の學生三名に依つて行はれたナンダコット頂に續いて一九三八年に日本からの遠征隊が送らるゝ旨が公表されてゐる」と書いてゐるが、昨今の御時世では假令英國から入山許可が來てもどうにもならない。

よし國內で資金が集つたとしても遠征の裝備に必要なものは輸入禁制品ばかりだし、國産で間に合はせるにしても、天幕には綿絲、麻が要る、登山靴には皮革がない、登山用ピッケル、コツヘルの類は製造禁止シニ

タイクアイゼンがお目直しに預つたのは御愛嬌だが手足にカンチキで登る譯にもゆくまい。その他いろゝ新規に整へること相叶はずとあれば、在來銘々が持ち合はせの裝備で辛抱し、足らざる所は大和魂で補ふことにして出掛けてもいゝが、印度も日本から見れば外國だから、學者の外國留學さへ差控へるといふ今日

山岳第三十三年第一號目次

黒部奥山と奥山廻り役(二)

中島 正文

山岳語彙採集報告(一)

高橋文太郎編

會務報告

圖版 五面 挿圖 三葉

總員二二〇頁

九月下旬發行。

山岳第三十三年第二號目下校正中
十一月下旬發行の豫定

では、中々おいそれと許可になり相もない。
こう八方塞がりとなつては、雪崩に埋没して逃れ出やうと藻掻いてゐるやうなもので、策の施しやうがない。吾等の日本が世界に雄飛して、佛蘭西の遠征隊みたいに金に糸目をつけずヒマラヤへ押出せるやうな時節が到來しないものでもないから、それまでは草鞋脚絆に金剛杖で六根清淨とお題目でも唱へてゐるより外に術はなからう。



◇圖書紹介◇

D-ANNOY bezwingt den Pamir.
von C. A. Freiherr v. Gablenz
14x21.3 pp. 241. Gerhard
Stalling, Berlin 1937.

邦譯「バミール翹破」

D・ANNOYバミール
を征服す

永淵三郎譯

ドイツ、ルフトハンザが極東航空路を開設するために昨夏行つた冒險的な探索飛行に關する報告書がこれで、この極東航空路開設に片棒を擔いで居る滿洲航空會社によつて早速邦譯された。

登山家には空飛ぶ文明の利器があらまりに性に合はぬらしいことは例のエヴエレスト上空を飛んだ企てがひどく輕蔑された一事でも理解される。たしかに、あの飛行は全くエヴエレストとマカルを取違へて撮影して來たりして笑ひ種を提供したのだ

が、本當は未知の空もまた未知の地表と同様に探檢的情熱を燃え上らせるものであり、よき飛行記録はよき山行記と一脈相通するものであるべきだ。

この一書を讀んで先づ聯想するのはパウワアの「カンチエ」である。ドイツ魂の強靱さと緻密さ、堅固なカメラードシヤフド、簡潔な表現等々、たしかにこの飛行報告はパウワアの名著に一脈相通する迫力を登山家達に與へる。

この飛行はベルリンからロードス島、ダマスカス、バグダッド、テヘラン等を経由してアフガンの首都カブールからヒンツウクシヤバミールの峡谷を越ふやうに飛び、ワカン陸路を越へてタリム盆地に下り、ヤルカンドに赴き、更に和闐、安西、蘭州を経由して西安まで飛んだものでその途次K2を始めムスタグアータヤナンガバルバットの偉容を望み見その他波濤の如く連なる山脈を望んで、その一半を想像するに足る美しい寫眞を挿入して居る。(邦譯ではこの寫眞も美しさを失つて居るのは惜しい)

「創造の驚異よ!

ひとは默する。想像もつかぬ程度がつてゐるこれらの巨大峻峻な米河を描くには我々の言葉は餘りにも貧しい。夢の様な美しさ」

Es ist traumhaft schön. —バミールの上空を飛んで彼等はこう叫んで居る。およそ風景を眺めあかすこ

とを好む登山家にとつてはこのよるこびは共鳴せざるを得ない。
この飛行はこの山岳地帯の故に我々にとつて面白いばかりでなく、偶然突發した事實そのものが更に冒險的な點で讀者を惹きつける。

それは歸路に際し、和闐に不時着したD・ANNOY機は馬西麟の部下に捕へられ、同地域内に幽閉されること四週間、その間この回教軍間の戦闘のため種々な經驗を味ひ、時には馬將軍の命令で爆彈を積んで敵地爆撃に赴けと強要されたものを拒絶したりしたが、この將軍が馬震英軍のために退却を餘儀なくされ、馬震英の入城となつて漸く釋放されたのであつた。しかも使用機は兵士の掠奪に合つて無慘な姿となつて居たのを漸く離陸させて、この不自由な「鳥」を操つて再びバミールとヒンズークシとを越へてカブールまで歸つて來たのである。

「私が幾週間ものあひだ楽しみにして來た時間だつた。私はいま本當に味はひ乍ら再び一服吸ふことが出來た。最上の煙草なのにフノーゼルは和闐ではうまくなかつた」

カブールに着陸直後の感想を著者はこんな素朴な言葉で述べて居る。こゝにも登山家が共鳴し得る氣持がある。この四週間の拘留中、三人が決して一人づつでは逃げ出さまいと堅く約束し實行したカメラードシヤフトもまた登山家社會ではその大切さを理解し得る。

P・フレミングの鞆組紀行は多くの人に讀まれたが、あの七ヶ月かゝつてフレミングが歩いた道を僅か十四時間で飛翔したこのD・ANNOYの主操縦士ガブレンツの一文もアドヴェンチュアに興味を持つ人々に讀まれていゝと思ふ。最後に邦譯の永淵氏の序文はこの飛行が行はれるに到る迄の日本人との交渉を語つて呉れて本書を讀むに身近かな興味を加へて居る。(島田 巽)

“SNOWSHOES”

by D. S. Davidson

Assistant Professor of Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia
The American Philosophical Society 1937

この書はアメリカ哲學協會の研究論文第六卷(一九三七年)として編まれた。著者 Daniel Sutherland Davidson はペンシルヴァニア大學の人類學助教である。

そこで茲に扱つた Snowshoes をその範圍に限定したかと云ふのに、廣義に解釋して組立て式(框型、輪型)のもの、板式(木材をラケット形に折りぬくか或は二片を横に繋いだもの、スキー形の長いもの)のものとの二つを大體において採つてゐる。後者にはギリヤークやアイヌなどの用ひる海豹皮張りの原始的スキーをも含めてゐる。

この二つの型の流れが歐洲、亞細亞、北部亞米利加の各地方で、いろんなヴァリエティを現はし見出されることを基點として、況くは人類文化の移動と關聯せしめて論究をすゝめてゐる。

この本には極めて多くの標本圖版と地理的分布状態を示す説明圖の挿入があつて、解説を助け又讀者の理解を速かならしめてゐる。この様な多くの標本を著者はどこで獲たかといふに、亞米利加ではこの種の材料をもつ研究所とか博物館が多くあるので、之によつてゐる。

研究の方法としては、概括的に見ればむしろ歴史的であるが、その出發點として標本の形態に最も重點をおいて、その形態上の基礎的特色を一々克明に探索し分析してゐる。例へばそのフレイム(框)が一つのものから出來てゐるか或は二つを結び合せたものとか、框の中に張つた編み方の變異とか、如何なる物で足につけるとか又は框に渡した横木(乗緒)の數などの點に到る細かい處までを調べあげてゐる。そして、觀方としては、一つの雪杵を、色々な特質(特色)の總體として、一個の文化複合體と見做してゐる。然もこれらの特質は二つのグループに分解し基礎的なもの、副次的なものとし、前者無くしては複合體を構成しないが、後者は左程必須なものでないと思つてゐる。それではこの基礎的な

特質はどんなものを指すかといふに

外側の框、その中への詰めもの(編み)、框にその詰め物をつける方法だと記してゐる、一つの組織體と見てゐるところ、新しい觀點と云ふべきである。併し著者は紀元前何千年といふ古い考古品でさへ、現在の採集品と並列して説いておるが、時代的な文化の背景を重視してこの種の物質文化の研究をする場合にはむしろもつと吟味されて比較する方がよいのではないかと考へる。併し物だけの比較を主點としてゐる故に、案外こんな難所は目立たない。

それから、スキー型のもの、之に類似すべき板型の標類との、相互間の關係といふか又はスキー型への進化過程といふか、こんな所の究明は略された形で、二者が直ちに並列されてゐるのも少し氣懸りである。尤も、この關係は歐洲の學者間に二流の考へがあつて、並行起原説をとるものと一元的な進化説をとるものとあつて、仲々厄介な問題だ。

輪標型の雪杵も可なり汎い範圍に亘つてゐる、然もその變異に極めて富んでゐる。この本では、日本の輪標として長味のある瓢箪形のもの、が収録されて、蝦夷のアイヌの略同型のものと比較されてゐる。尤もアイヌに屬するものにも、前輪と後輪の組合せ式のものももう一つ記されてゐる。日本の輪標の形が一般から云ふと、北部にいく程、このアイヌ形に近似し、一つの木片をたわめて頭部の一點で繋ぎ合せた瓢箪型のもの

が現はれてゐる。之は岩手縣の一部から青森縣太平洋岸に見え、三戸郡階上村のものは長さ七〇釐もあるのは面白い。わが國の輪標の型は大體七つにも分れて、極めて變異に富んでゐる。

この標に比して、スキー型のものになると非常に尠く、明治後期における外國スキー輸入の以後、之に關する模倣品が現はれた以外は、發見に苦しむのである。秋田の一部にヤマゾリといふ一種のスキー型の滑り具が現はれて居るにしても、之を直ちに本邦スキーの發生と結びつけて云ふのは早計であるから、ダヴィットソンのいふ板式雪杵(Plattenskiis)に該当するものは、寧ろ日本の田圃で使用する田下駄、大足の類(この中には板カンジキ、輪カンジキといふ呼名のあるものがある)が近い物として採り上げられる。越中白萩村の深田で苗植糸の時使用する竹竿のマツド・スキーともいふべき、スキーを暗示する民具なども頭に浮んでくる。

上述秋田の「山櫓」は堅雪滑りに用ひたもので、現在では全く小兒の遊戯具で、その起原も約百年位らしく、文獻でも七十年位は遡れる。それは全長三六、七釐で、乗臺の上尾部にアイヌ模様を想はせる如き極く原始的な彫りの飾りをつけてゐる。

概して民具の發生、發明はその土地の自然的環境とかその人々の文化的な内容乃至は實生活の態様の如何

に據る所が大きいから、わが國に中央亞細亞の一部に發生した如きスキーといへるものが果して存在しておらなかつたとするも、何等の不思議はないのである。この本には、瑞典で發見された青銅器時代のスキーの斷片が紹介されてゐるが、之には美しい彫刻がきざまれてゐる。こんなスキーで、日本の粉雪を滑つたらと、想像は逞しく躍らされる。

この著者の云ふところでは、木の雪杵(スキー形)の型の二つの流れは、北極型と南方型とに分けられ、(之は瑞典の學者による)、南方型のスキーの著しい特色は、足臺の部に厚みの隆起があり、乗臺に平行して附けた革紐によつて足に結ばれる。所が北極型はこの隆起した足臺を缺いており且つ革紐は臺に直角にかけられた穴を通して足につけられる。そして、南方型の最も古い標本は、紀元前千五百年の頃と推定されるもので之は Reininga で發見された。然も南方型は新石器時代に既にフィランド、スカンデナヴィヤ地方に汎く流布されており、過去現在を通じて、知られてゐるこの型の分布地域は東はウラル山地と中央ロシア、西はノルウェーの間である。之に反して北方型はサモイェツド、オスチヤーク、チユクチ、アイヌといつた西比利亞土人の間に普通に見られる。

そして、この型は屢々毛皮が臺に取りつけてあるのが特色である。明治後期に日本へ輸入されたスキーはこ

の南方型の最も進化した形の一つと見られやう。(高橋)

稜線(第二號) 下關山岳會年報

の南方型の最も進化した形の一つと見られやう。(高橋)

下關山岳會は本年度の「山日記」に依ると、一九三〇年の誕生だからもう六年の年月を経てゐる事になる。會員三十名ではさして大きなグループとも云へないが、その年報の内容から見ると相當纏つた、而も眞面目な人達の團體である。

日本山岳會にも随分多くの會報年報の類が寄贈されて來るが、仲々是はと思ふやうなものはない。定期的に來るものでも、體裁内容ともに充實してゐるのは洵に寥々たるものである。此の間、K氏から會報總まとめくりをやつて見たら、杯と云はれたが、口の悪い私には、そして氣の小さい私には、後の樂りが恐ろしく速もそんな眞似は出來相にもない。

「稜線」第二號の主要記事は伯耆大山の北壁研究であつてその爲めに約三十頁の頁數を使つてゐる。私は嘗つての冬、道後山から遙かにこの大山を望見しただけで何も悉しい事は知らないが、岩登りにも、スキーにも、仲々棄て難いグレンデを持つてゐる様である。地理的關係から云つてもこの會員達が此の地方の山々を中心として精進するのは當然であるが、登高記録にも北アルプスへは三四回しか行つてない様だ、然し山

事變と登山具

西岡 一雄

事變以來正に一週年になるが、それが私共の小賣商人にどう響いたかといふに、答は今迄のところ不思議にも大した影響は感じなかつたといふことである。これは昨今に至つてこそ皮革や綿麻生地や銅鐵類に非常な制限をうけたが今年五月頃迄はまだ材料や原料が多少の高騰はあつたにしても品物が尙潤澤であつたが故に小賣に感ずる程には至らなかつた例へばスキー及びその附屬品に徴してもほんの僅かな値上りで済み材料も自由に供給をうけたから従つてそれを使用する人へもさして響くこと少なく平年並の取引に事缺かなかつた。只シールのみが坪一、三〇位の優良品が一躍二、〇〇にのぼりスキー靴が凡そ一圓位の高騰を示した位であつた。それが凡そ今年四月頃迄は何とか、うわさと臆測と不安とはあつたが事變はつまり吾々登山家の間にも大體平素ながらのバランスが保てゝゐたといふことになる。しかるに四月より五月に至り面目は全く一新して靴に税金がかかるやうになり材料の不足を感ずるやうになり六月に入つてはいよいよ、吾等に必要なる綿類に制限が課せられてより俄然原料品が手廻らなくなり、相場はあつても生地や材料がないから需要に

應ずる供給がつかなくなつてしまつた。それでは値段はどうか變つたかといふに、平年ならば十五圓の靴が十二三圓になつたのみならず、品は却つて悪い、二十五圓した屋根型壁付き五人寝のテントが四十二三圓もする。一本三錢五厘でうつた舶來クリンカー紙が七錢になつた。セキユリリータスミクローメーターの舶來ロープが八圓計り高騰した。十八圓でうつてもよかつたビツケルが二十五圓といふ値段を示し、二十三圓位で商つた羽毛入シユネロープが何と三十三圓に飛び上り、十八圓のロープが二十八圓にもならうとしてゐる。(以上はすべて好日山莊の値段)かういふ値段で一應は諒解してもらつた上にそれでもさげの中はまだ良かつたが最近に及んでその生地その原料が遂に手に廻らざるが爲めに注文に應じ切れなく全く謝絶するの模様になつた。ロープ、クツ、テント、ベツグ等皆この例である。ファイバー入りを應用すれば事は足るといふ人もあらうが天幕の知きは經驗不足のため安心してそれを賣ることは出来なない。毛靴下は純毛を織るに一々お上の御許しを乞はねばならず、一足一六〇が二、三〇になり、八〇が一、二〇になり正に五割方高くなつてゐ

てしかも自由に織ることが許されな事情にある。一方輸入が途絶して以來、靴紙は粗末な和製が幅を利しなつて今や市場には舶來品は全然影を没した筈である況んや日本品の技術の優秀は遂にビツケル、アイゼン等に至つては完全に舶來品を驅除しシェンク、スルクの名は遂には若き徒の間にその名を忘れられんとしてゐる。最も甚しい相場の變動はアルミニウム類でコツハの如き十割近き高騰といはれてゐる、只こゝに面白き現象を見せてゐるのはこれらを商ふ商人筋は相場に敏感であつてすぐに卸値にさし響いてくるがデパートはその點應揚であつて、値段の相場は直ちに響かず上るにしても又下るにしても時をへてからの事故、小うりは二三割高くなつてゐてもデパートは舊態依然として仕入れ當時の値を固守するから前記一本の紙の値段の如き四錢の和製品がこゝでは三錢でかへ、七、五〇といふコツハが尙五、八〇であつたりするから、大阪に於ける一流の運動具屋が反つてこのデパートの品を買ひ占めるといふが如き奇現象を示したこともある。それでも、そこゝから品物が出廻りさへすれば商賣は時局を楯に高くついても何とか成り立つてゆくが、統制がよくとれて原料にますゝ不足を感ぜばその不足の範圍内で品物は高くなる一方でも品うすは遂に如何ともなり難く經濟

上のバランスは全く破れて拱手して一年を見送るか、轉向して他の商賣につくか、茲に新材料による新工夫品を發明するかの境地に達するであらうが、現在の皆の氣持は先きはどうにかならうといふ捨鉢氣分が安心氣分が知らぬが、その場合へに即した手段をとり、先づ今冬を迎へようとするらしい。それにしても登山やスキー具に直接關係あるものが皆制限下にあるのだから今冬のスキー具については一番案ぜられる。スキー材は先づよいとしてヒツコリイは僅かの入荷はあらうが吃驚する程高くならう。バツケンや締具類の金屬殊に皮革類はどうなるであらう。ヤツケや靴下、數をあげると一々税金物であり統制物計りで只々前途は小うり商にとつて暗慘としてゐる。皮革の不足は職業野球人をして廢業さすかは知れぬが幸にして、登山家は靴をズツクのゴム靴にかへることも出来るし一層思ひ切つて地下足袋や草鞋の昔にもどすこともよい。テントは生地不足のため廢せられても昔の工夫の間に傳つてきた俵松の草家テントを再現してその技術を残すのもまたよい。いよいよ、いなくなればビツケルは金剛杖となり、靴下は脚絆に變つても辛抱は出来よう小賣商も登山家も今後をうした苦難忍受時代に入つたのであるから、こゝは一つ耐へ忍んで利用厚生を講じて

こゝ迄かいてフト思ひ出すのは「今昔物語」に伊勢人を罵りて「伊勢國は……貴き賤きを問はず互に隙を量して弱き者の持ちたる者をも憚らず奪ひ取りて己が貯とする處なり」といひ又西行の「いせ人はたが事しけり笹粟のさゝにはならで柴にこそあれ」とのせてゐる程で伊勢人の自利主義なることは遠き古より聞えてゐる。この事は現在でも事實であつて關西人の利に敏いことは今更に驚く。前記三、五〇のコツハが七、五〇になり今は八、二〇にしようといふ計つてくる、これこそ暴利でなく何であらう。靴屋の如きも原料薄を口實にして卸うりはなるべく拒み小うりで利益をとらうとする。百方たのんで作つてもらつてしかも仕事は大いに粗末だ。一切のものをこれをよき事にして値上げにヒシカキあつてゐる關西人の中にあつて、東京の靴屋には流石にかたいところがあつてうれしく又ビツケルで有名である山内は私から値をあげねば苦しいだらうにいつてやると、あげたいのは山々だが自分からはいひにくい適當にやつてくれといふ挨拶であつた。今更にこの人の無欲には惜しみなく敬意を表明してよい。かくして自分等は一方極力、問屋や職人の値上げを牽制しつゝ、客人の御きげんを損せぬやうになるべく安く且便宜を計らねばならぬ。(以上は私事であるが愉快なニュースとして記しおくに止めてをきたい)。金のある大店はドシ

「材料を蒐集して今後に備へる事が出来るが、それはゆかぬ小店ではその日限りの天気次第に浮き沈みまくり返すに過ぎないといふのが現状だらう。前途の事を考へぬ譯ではないが金のない悲しさは何とも出来ぬ始末。さてそれでもこゝししばらくはストツク品や修繕物で間にあはせてゆくか來年の今頃の上河内あたりでの登山者の姿を想像して見るとそこに面白い變遷が起るのではないからうか、まさか菅沼さんがとくやうなシークな姿の登山者は影を没してそこにもここにも昔の登山者その儘の姿が表はれるのではなからうかと微笑れる。此際古き山の用具と技術の再認識はあながち無駄でもなからうしざりとてもう二度とは昔には返らずして新しき何物かと表はれるか私等は敏感でなければならぬと思ふ。

國際登山聯盟の事

前號に於て登山團體の國際會議の事に就ては少し述べて置いたが七月二十六日附の手紙が又來たからこゝに御紹介する。

拜啓

別葉によりプラグにて開催される第五回UIAA總會次第送附申上候、尙總會後トラに登山の豫定に有之候、貴會よりも代表委員御派遣相成我が國際機關への御参加方希望致居候、御出席の節は豫め右委員の御氏名御通知被下度、荷物並に宿舎に關する御問合せは總て左記に

御願申上候 中略

拜眉の日を御待申上候 敬具
會長 C エグモン・ダレン

國際登山聯盟(U I A A)の第五回總會は本年八月三十日午前九時プラグ地學協會に於て開催、會議次第は次の如き豫定に有之候

一、委員の紹介 二、巴里會合の報告 三、U I A A會長の報告

四、實行連絡委員會 五、諸報告(之は次の如く分る)

A 從來の諸會合により繼承せる諸問題

イ、雪と雪崩 ロ、自然の保護

ハ、國際山岳年報 ニ、山の遭難の犠牲者中貧困なる者に對する救済基金 ホ、救授信號

ヘ、案内者の養成と其の職務 ト、登山案内所

B 新しき問題

イ、山岳會の文筆的及科學的仕事

ロ、山岳博物館 ハ、短波による無線電話連絡

ニ、案内者登山者スキーヤー及各山岳會自身の責任

(所謂登山道德の事ならん) ホ、小屋の照明

ヘ、次期會合開催地指定 ト、有志の報告、提案等

以上
× × ×
右の中には吾々にも大いに問題になる事が含まれてゐる、同會議の結果報告を早く知り度いものと思ふ。

(I Y)

小島さんのこと

今年の夏は實に不順な天候で、どちらの御家族でも老人の方は病氣になやんで居られたらしい。小島鳥水さんも高血壓で絶對安靜といふ程重症に陥られ、我々としても會として御見舞したが、幸ひ元氣になられて富士山麓から歸京されたのおたよりのあつた。何よりのことと欣んでゐる。

二つの小さな集ひ

北からバツタを追かけながら上京した伊藤秀五郎君、南から涼風を求めて上京された樽さんを中心にした小さな集りを晩翠軒でやつた。パリから最近歸つたばかりの藤島君も加へ十人近くのものが集つた。北海道や臺灣の話やバリの話さては古い話のきけるのも矢張お藤元の有難さだ。

それから一週間して急に松方が北京から歸つて來た。藤島君の肝いりで五六人が天一に集つた。相變らずの元氣な松方をかこんで支那の話をきくことができた。近日中北京に歸るといふ。どつちも急に決まつたので廣く御通知出来なかつたのは残念であつた。

新しいカット

燕(第四頁)及び月(第六頁)は中村清太郎筆
熊(第九頁)は茨木猪之吉氏筆

軍機保護法の施行と撮影等の注意

(二)

「山日記」より

ヲ、宇品港域第一區及第二區

ワ、廣島縣豊田郡忠海町大久野島並ニ其ノ地先三深里以内ノ海面及其ノ海面内ノ島嶼

カ、豊饒要塞近傍
北緯三十三度三十分以南、北緯三十二度五十五分以北東經百三十二度三十分以西ノ愛媛縣

北緯三十三度三十分以南、北緯三十二度五十分以北東經百三十一度四十五分以東及東經百三十一度五十二分三十分以東北緯三十二度四十五分以北ノ大分縣

ヨ、下關要塞近傍
北緯三十四度三十分以南東經百三十一度以西ノ山口縣

(山口縣)
下關市ノ一部
阿武郡見島村ノ全域

豊浦郡 小月町、清末村、玉司村ノ各一部

(福岡縣)
八幡市、戸畑市、若松市、門司市、小倉市ノ各全域、直方市ノ一部

企救郡ノ大部(中谷村及東谷村ノ各一部ヲ除ク)

遠賀郡ノ大部(岡垣村ノ一部ヲ除ク)

宗像郡 神湊町、大島村(沖ノ島ヲ含ム) 岬村、勝浦村ノ各全域、津屋崎町、池野村、河東村、田島村ノ各一部

京都郡 菊田町、白川村ノ各全域、小波瀬村、椿市村ノ各一部

田川郡 上野村、方城村ノ各一部

鞍手郡 木屋ノ瀬町、植木町、劍村、古月村ノ各全域、西川村ノ一部

タ、對馬要塞近傍
長崎縣上縣郡及同縣下縣郡ノ全域

レ、壹岐要塞近傍
北緯三十四度以南、北緯三十三度二十分以北東經百三十度以西ノ長崎縣、佐賀縣及福岡縣

福岡縣糸島郡北崎村小呂ノ島

ソ、長崎要塞近傍
北緯三十三度二十分以南、北緯三十二度三十分以北東經百二十九度四十五分以西ノ長崎縣(西彼杵郡黒崎村及同郡三重村ノ各一部ヲ除ク) 長崎縣西彼杵郡式見村大崎——時津村烏帽子岳——長與村高田——矢上村黒岳——日見村小崎ヲ連ヌル線以南ノ長崎縣

(長崎縣)
佐世保市ノ一部



會員通信

珍らしい對面

茨木猫之吉

誰れがつけたか、アルプス銀座、山小屋も八月末ともなればそろ／＼番人も下山の用意と夏山の収入に考へおよんでいる。

本夏は出脚をくじかれ、氣乗りのしない重い氣分で、それでも一度高い處へと思つて信州松本、豊科から例の烏川一ノ澤を登る、赤松の林も静かで秋草のなびく中で蟲の音も頻りにする初秋の涼しい風が吹いてくる。

常念の尾根に出た頃は日光も西に傾いて雲間から穂高や槍が一すばかり姿を出している、小屋の前は寢具や枕がゴロ／＼干してある、タンクも横倒しになつてゐて、何んだか水害の後の様だ。

小屋主と二三の夫が一ノ俣の倉庫へ納める荷造りをして、小屋番も明日は降りますよ、と云つて、今日は近來ない好天氣でした、それに若いお客さんが二名カメラマンは釧から縦走し一名は烏帽子から執れも元氣で明日の相談をしている様だ、小屋も最後の晚餐が、意外な御馳走でした、爐端で大夫の話を耳にすると、最近の遭難事件、保険拾萬圓謎深まる料理人の死、都下の新聞の三面を賑やかした、どうやら獵奇的事件、どうも同情出來ぬので餘り興味もないから他の山々の愉快な話に移る。

常念岳の御來光をと思つて四時に起きたが猛烈な雲で、登る氣もなし、若い連中は出懸けた、どうやら周囲も明るくなつた頃元氣で降つて來た、折角カメラにと思つて、かなりネバツて居たが遂に駄目だと残念そうに眞黒い顔から白い齒を出して言つている、朝食を共にすまして、上高地及豊科に降る兩君に別れて、僕は獨り横通岳に登る、どうもガスが深い、之れでは繪も描けない、東大天井も過ぎ、大天井岳で暫らく休んで考へた、西岳の小屋も既に閉鎖してゐるので喜作新道から千丈澤を高瀬川湯俣温泉に出る目的だつたが、暫らくガスの晴れるのと天候を待つたが、とても見込みたゝず、あきらめて、燕岳方面に急ぐ、恰度爲右衛門岩を越して、或る岩角に出て道を眺めてみると、すぐ眞下直徑十

五六間西面高瀬川に向つて偃松の傍に眞黒い動物、やあ熊だ熊だ、長い毛並も素晴しくツヤがいゝ、頻りに首を振つて餌でも探している様子、側面だつたので頸の月の輪は見えなかつたが動作は頗る悠々として四歳位が大きかつた、私は驚ろいたがカタツを呑んで岩蔭に身をよせ小石一つ落さぬ様にじつと見守つていた、が遂に人の居るのにも氣付かず、草付と偃松の間を下へかくれて見えなくなつた、そばの小さい岳樺が二本ゆれた様と思つた、高瀬の溪は相變らず眞暗だ、正確の時間は昭和十三年八月三十日午後三時頃、爲右衛門岩と蛙岩の間、チャプリンが銀ブラして天金で天ぶらを食べた話、以上珍らしくも意外だつた。

それから約二三分ルツクサクツのヒモをしめなほし二間程後戻り東面の短道をからんで眞直ぐかけ上り、振り向きもせず走つた。燕山莊に着いてお茶をガブ／＼呑んで夕立を待つた、時間がないので一息に中房温泉へ降つた頃は電氣が明るかつた、別館に案内され玄關にどかりと荷を下してから、ゆるりと湯にしたつて落ち付いた、雨も上つたらしい、話半分に聴く人もあつたが宿の主人は、それは近頃「珍らしい話」です、まだ居るのでしやうなあ、と眞顔になつて聴いてくれた。(九月七日)

× × ×

- 北松浦郡 上志佐村、世知原村、柚木村ノ各一部
- 西彼杵郡 大串村ノ一部
- 東彼杵郡 早岐町、折尾瀬村、江上村ノ各全域、上波佐見町、川棚町、下波佐見村、宮村、崎針尾村ノ各一部
- (佐賀縣)
- 西松浦郡 有田村、二里村、大山村、曲川村、東山代村ノ各一部
- 南、南西諸島近傍
- 北緯三十度五十一分以南ノ鹿児島縣及沖繩縣
- 南、基隆要塞近傍
- 東經百二十一度三十六分以東北緯二十五度四分以北及東經百二十一度四十二分以東北緯二十五度以北ノ臺灣
- 南、高雄要塞近傍
- 北緯二十二度五十分以南東經百二十度三十七分三十秒以西ノ臺灣
- 高雄州旗山郡旗山街磅毒坑
- 同州同郡田寮庄南安老
- 同州同郡湖内庄白砂崙
- 同州同郡庄頂茄定ヲ連ナル線ト北緯二十二度五十分ノ間ノ地域
- 北緯二十二度二十四分以南、北緯二十二度十六分以北東經百二十度四十二分以西ノ臺灣及高雄州潮州郡歸化門附近
- 澎湖列島(一部ヲ除ク)

- 北緯四十二度以北東經百二十九度三十分以東國境以南ノ朝鮮(咸鏡北道富寧郡三面海津津端及其ノ附近ノ島嶼ヲ含ム)
- 南、永興要塞近傍
- 北緯三十九度四十分以南、北緯三十九度以北東經百二十七度以東、東經百二十七度四十五分以西ノ朝鮮
- 南、巡威島近傍
- 北緯三十八度以南、北緯三十七度四十分以北東經百二十四度三十分以東、東經百二十六度以西ノ朝鮮
- 南、仁川近傍
- 北緯三十七度三十分以南、北緯三十七度十分以北東經百二十六度十五分以東、東經百二十六度四十五分以西ノ朝鮮
- 南、八口浦近傍
- 北緯三十五度以南、北緯三十四度三十分以北東經百二十五度四十五分以東、東經百二十六度五十分以西ノ朝鮮
- 南、鬱陵島近傍
- 慶尙北道鬱陵島
- 南、鎮海要塞近傍
- 北緯三十五度二十分以南東經百二十八度十五分以東、北緯三十五度十分以南東經百二十七度四十五分以東、北緯三十五度以南東經百二十七度三十分以東ノ朝鮮
- 南、イ號乃至ル號及力號乃至前號

スイスだより

僕達はローバー十四馬力のセコハ
ンを買つてグリンデルワルドに來ま
した。七月二十四日の夕方ロンドン
を出て、二十七日の夕方グリンデル
ワルドに着きました。フランスの田
舎の景色の美しき、どこで食べても
旨い料理、ブルゴーニエの地酒の味
眞直な並木道、少ない交通量、など
に自動車の旅は百二十パーセントに
満喫しました。

當地に着いても、ブラバンドはビ
ーチホルンへ出掛けて留守なので、
ペールエツクやメンリヘンに散歩し
て時を過ごしてゐましたが、ブラバ
ンドも歸つて來たので、ウエツター
ホルンを振りだしに始めました。八
月二日グレットクシヌティン小倉泊、
三日ウエツターホルンに登り當地歸
着、更らにクリスチャン・カウフマ
ンなる若いガイドを加へ、四日グギ
小倉、五日にメンヒをノルレンから
登つてユングフラウヨツホーアイ
スメア——ミツテルレギ小倉泊、
六日(今日)ミツテルレギ尾根をア
イガーに登り晝過ぎアイガー・グレ
ツチャーの驛に下りました。これは
ウエツターホルンで足馴しの後ブラ
バンドの決めたプランでした。明日
からワリスに行きます。この方のプ
ランは今のところ、チナールの谷に
入り、ムンテット小倉からトリフト
にチナールルートホルンをトラヴァ

スし、トリフトからオーベルガーベ
ルホルンを登りツエルマツト、更ら
にシエーンビニールにゆきダン・プ
ランシヌ、ツムツトグラートを買ッ
ターホルンに、次でワイスホルン、
ピーチホルンといふ尨大な計畫です
が、果して天氣がどうか、また僕達
の體力が續くか判りません。

ウエツターホルンは豫想外のやさ
しきで驚きましたが、ノルレンの水
とミツテルレギの岩とは非常に面白
いものでした。グギー小倉のよきも
素晴らしいものでした。横さん尾根
は小倉を出てから頂上まで、づつと
岩ばかり、固定網のない個所でも相
當むづかしく、久振りに面白い岩登
を味ひ大いに満足しました。網の下
つてゐる處はよく横さん一行が綱な
しで登れたとホト／＼感心する位の
むづかしさで、日本の山との違ひを
沁々感じました。實際あんなに始め
から終りまでガツツリした岩場に出
來てゐる尾根はアルプスでも少いと
ブラバンドの話です。彼はピーチホ
ルの東尾根をまだ知らないから登
らうと張り切つてゐます。
ノルレンでは始めて水といふもの
を見ましたが、成程僕達がいくらピ
ツケルを振つてもヒヤの入らない様
なもので之では商が立ちません。大
體日本人の通性らしく、岩なら可成
ラクですが、着氷の上立つとコワ
イです。
會員の高木正孝君がドイツへ來る
ので楽しみにしてゐます。八月六日

瑞西グリンデルワルドにて
(田口一郎・二郎)

南洋より

南洋のパラオにやつて参りました
熱帯産業研究所で油をしぼられて居
ります。晝間は光、太陽、練、汗、
海と雲と言つた感じ、しかし夕方の
氣持好きはたとへ様もありません、
椰子の梢が暗く大空を隈どり、星が
光を増す頃などは—Southern Cross
も見えます、島民はとても唄が上
手、教會から流れる二部など思はず
引きつけられます。アバイの彫刻な
ども面白い様です、諸兄の幸福なる
夏山を祈ります。
(岡彦一)

兵營より

前略 今回教育召集にて當隊に入
營致しました。非常時局の際ですか
ら、このまゝ赤紙に變更しさうです
當分山へも何處にも行かれまん。大
いに張り切つて幹候に通る様に致し
ます。
又再び治つた時には山の部隊長と
なれる様將校になりたいものです。
元氣に勤めて居りますから御安心下
さい。草々

三軒茶屋瀨尾部隊橋本隊
補充兵 (濱野正男)

雨の武蔵山

去る七月三十日上野を夜行にて發
ち上州の武蔵山に登つて來ました。

二揚グル陸地ノ地先三海里以内ノ海面

- 四、左ニ揚グル区域内ノ水陸ノ形状
又ハ施設物ノ狀況ノ空中高所ヨリ
ノ撮影又ハ其ノ複寫若ハ複製但シ
複寫體ヨリノ高サ一〇〇メートル
以下ノ場合ヲ除ク
- イ、第一號口號ニ揚グル區域
- ロ、第一號ハ號ニ揚グル區域
- ハ、前號ニ號ニ揚グル區域
- ニ、前號ホ號ニ揚グル區域
- ホ、京濱地方 東京市、横濱市、
川崎市、川口市及市川市
- ヘ、前號ヘ號ニ揚グル區域
- ト、第一號ニ號ニ揚グル區域
- チ、福井縣、石川縣、富山縣及新
潟縣
- リ、名古屋市
- ヌ、前號チ號ニ揚グル區域
- ル、京阪神地方 大阪市、堺市、
岸和田市、中河内郡、北河内郡
三島郡、神戸市、西宮市、尼ケ

獨逸山岳會より
の嬉しい便り

獨逸山岳會が合邦によつて獨逸山
岳會と名稱の變つた事は既に御承知
の事と思ふ。日獨伊防共協定杯の事
があつて近頃獨逸人が日本に示す好
意が色々の方面に顯著に現はれてゐ
るのは何と云つても嬉しい極みで此
の間もミニヒェンからの手紙で、
日本山岳會とは今まで毎年機關誌の
交換をしてゐるが不足分が大部ある
ので送つて呉れないか、代金は折返

崎市、武庫郡及京都市
ヲ、前號リ號ニ揚グル區域

- ワ、前號ヌ號ニ揚グル區域
- カ、第一號ヘ號ニ揚グル區域
- コ、前號フ號ニ揚グル區域
- ク、前號ク號ニ揚グル區域
- ケ、前號タ號ニ揚グル區域
- コ、前號レ號ニ揚グル區域
- ネ、前號ソ號ニ揚グル區域
- ナ、第一號ト號ニ揚グル區域
- ム、第一號リ號ニ揚グル區域
- 前號第三號イ號乃至ヤ號及第四號イ
號乃至ナ號ニ揚グル區域ニ付テハ關
係人ノ閱覽ニ供スル爲其ノ圖面ヲ當
該區域ヲ管轄スル市、町、村役場(朝
鮮ニ在リテハ府廳、邑面事務所、臺
灣ニ在リテハ市、街、庄役場)、警察
署(臺灣ニ在リテハ郡役所、支廳ヲ
含ム)又ハ憲兵隊ニ備付ク(續ク)

し御送金する、尙自分の方のツァイ
トシュリフトが揃つてなかつたらな
い分は無償でお送りする心算だ、と
いふ事を云つて來て呉れた。實際嬉
しい便りだと思ふ。パツタナンバー
の交換に就ては會務報告にもある通
り黒田氏に一任して置いたからいづ
れ吾々の圖書室にも最初からの Ze
itschrift des Deutschen (und Öste
reichischen) Alpenvereins が全部
揃ふ事になる。大いに御期待願ひ度
いと思ふ。
(IY)

同行者は望月達夫君でした。川場から登る心算を自動車の都合で急に伊香原のホダカ口から摺淵、登戸經由不動坂を経て前武尊頂上附近の小屋に一泊しました。この小屋は「山日記」には頂上にあつて水の便よろしき様ありますが、之は頂上より距離にして百米突位東下、森林帯の外れにありました。水は全然ありませんから萬一この小屋に泊る積りなら下の御澤で御飯はたいに行つた方がいいでせう。私達は日頃懸けのいゝ故か小屋に着いて暫くしてから猛烈な豪雨が降つて来た爲め、その水を利用する事が出来ました。此の雨は南アルプス其の他で多くの遭難者を出した憾みの雨になつたものであります。

八月一日は北へ縦走する豫定を變更して劍ヶ峯を往復したのみで川場道を下つて了ひました。不動岳附近には鎖などあつて仲々面白い所があります。荒山澤の右岸にある立派な行者小屋に至る附近の陸測五萬の地圖の出鱈目には呆れかへりました。決してあんな細い尾根ではありません。川場湯原までの距離も實際はもつと短くていいのではないかと思ひます。川場湯原の都屋で四時間程悠びて五時半の終バスに乗り、沼田發七時二十九分の上りで歸京致しました。

前記の旅行は、實は此の旅行の足馴しの心算であつたのであります。八月十七日の夜行で新宿を發ち、十八日須原に下車、沛然たる雨の中を今朝澤出合の御料小屋に一泊、十九日は東川御料小屋で六人が三人づゝとなり、村尾、小柳、新羅の三人は北澤の小屋經由空木へ行き、私達三人、望月、佐々木と私はそのまゝ伊奈川を遡る事になりました。荷の重い事や棧道が落ちてゐて高廻りしたり、ザイルを使用したりなどした爲め案外時間を食ひ、この日はツバメ岩附近の河原にビーヴァアツク、二十日は伊奈川源頭の上の千疊敷に野宿なし、二十一日は三ノ澤岳を往復しジャンクシオンから伊奈川の頭を經由、楡尾に至り、南走をやめて中御所谷の濁澤へ下る事になりました突然の變更ではありましたが、谷や岩には相當心臓の強い連中ではあつたし、ザイルも三十米突のを一本持ち、食料もまだ豊富だつたので些さかの不安もなく未知の溪谷へと下降する事に決して了ひました。詳細は本年度第二號の「山岳」に發表致しますがザイルさへあれば餘程の悪天候でない限り大した困難なしに下る事の出来る谷だと思ひます。但し餘り初心の方にはお奨め出来ない事をお断りして置きます。

伊奈川と中御所谷

(吉澤 一郎)

中御所谷も仲々いゝ溪でありませ徑路も最近バルブの原料とりに小屋掛けして人夫が這入り込んで居ますから案外奥まで來てゐます。赤穂から一度私の母方の田舎に戻り、居ながらにして仙丈、鹽見などを見ながら朝夕を過し、二十四日夕刻無事歸京致しました。

大別山麓にて

(吉澤 一郎)

拜啓 陣中多忙の間、遙かに諸先生、山友の御活動をしのび申上候、本日六月號會報を潜山の北、大別山麓の敵彈飛鳴の村落の茅屋の傍らにて受領、なつかしく山戀ふ心一杯にて一氣にむさばり読み、又讀み返し珍重に團囊に納め、又夕刻は營火に三度讀みふけり候、拙生昨年八月より出征從軍、北支蒙境の山岳戰、更に杭州灣敵前上陸、崑山の一戰、廣徳の高原戰、南京の攻略戰、蕪湖和樂、巢縣、蘆州、挑溪鎮、南港、安慶、潜山と轉戰、其の間紫金山、白馬山、枕中山、大別山、といつても山岳戰の先登を切り、多年山友と共に鍛鍊せる心身の役立ちし事を誇りと致し居り候、「山岳戰に於ける装具」其他につき實戦に體驗せる事多く、無事歸還の晩にはと思居り候、木暮、小島、高野、島山、冠先生、黒田、吉澤、東の諸先輩によるしくいよゝ武漢に向つて大進軍に候つきぬ筆を置いて。

潜山北方大別山麓〇〇にて
(北田正三)

香港へ



會務報告

九月定期理事會報告

九月八日午後六時半於虎ノ門事務所開催
出席 武田、藤島、黒田、吉澤、

訂正
前號「山の繪の傳統」(中村清太郎氏)中三段二行目は「山らしい山」が正しく、尙三段終行の難常は非常の誤りにつき御詫び旁々訂正致します。

一、早川理事轉任に付き殘存期間補缺理事選任の件
一、小集會、「スキス雜誌」評議員藤島敏男氏講演、於商工俱樂部十月六日開催の事
一、山岳バックナンバー整理の件
本號第六頁の通り
一、會報一號より五十號まで合本金三圓五十錢にて二十五部賣出の事
一、獨逸山岳會との會誌交換の件
黒田副會長に依頼
一、「山岳」本年度第一、二號の件
第一號内容は第四頁の通り、第二號は吉澤氏の伊奈川及び中御所谷濁澤の記録及望月氏のケラス傳他、十一月末發行の豫定
一、六甲水害調査、津田理事より報告あり
一、會費滞納者の件 以上
第七回小集會
荒天の續いた七月四日、やつと雨が止んだのを幸、商工俱樂部で後藤朝太郎氏の講演を聴いた。題は「支那の山とその國民性」幻燈を使つて興味あるお話であつた。殊に漢口より重慶への長江沿岸の風光は時節柄

見るものに深い印象を興へずには措
かなかつた。(鳥山)

來會者

木暮、鳥山、吉澤、佐藤、荒井
磯貝、神谷、三崎、山下、外山、吉
田、早川、宮崎、串田、中司、星野
酒井、八木橋、飛川、大熊、山縣、
川崎、野口、茨木、山崎の諸氏並び
に會員外十名合せて三十五名

會員計報

名古屋市 村野時哉氏(大正四年入
會)昭和十三年七月逝去せらる。
東京市 佐竹正一氏(大正六年入會)
昭和十三年七月逝去せらる。
本會は茲に謹みて哀悼の意を表す。

新着圖書

廣島山岳會々報(七一) 同 會
歩行 第七號
旅路 七、八月號 關東旅行俱樂部
東京アルカウ會會報(八月) 同 會
ケルン終刊號 其 社
横濱山岳會會報(10)號 其 會
東京登山溪流會々報 同 會
山友 第二號 武藏高工山岳會
アルカウ趣味第七號 日本アルカウ會
東京旅行クラブ會報 七、八月號
中部山岳 第十號 長野縣廳
安田山岳部月報七
ツリスト 七、八月號 J T B
岩雪崩 七、九號 T M C
京城帝大蒙疆學術探險隊趣意書
國立公園 七月號 國立公園協會

名古屋山岳會々報七、八月號 同 會
山岳趣味 七、八月號
東京市山岳部々報 五八、五九
樹氷 三、四號 東京スキー研究會
GAKUTO 九 善
因伯民談 七、八月號 鳥取郷土會
地學雜誌 七、八月號
ベテスツリヤン 關西徒歩會
甲山峽水 夏季號 山梨縣
明峰山岳會々報七、八、九 同 會
公園其他體力向上施設概観 厚生省
全國公園運動場調
登山とスキー 七、八、九月號 其 社
がくれい會會報 其 會
頂 第四 其 會
山小屋 七、八月號 朋 文 堂
リニクサック(早大山岳部機關雜
誌)體裁變更す
こだま 第三年第六號 東京晴嶺山岳會
みなかみ 七月號 奈良山岳會
山彦 第十一年七號 其 會
はひまつ 五、六、七 偃松山岳會
嶺山岳會々報 其 會
「勿來地質説明書及同地圖
西大地 〃 〃
新井濱 〃 〃
宿毛 〃 〃
長野縣長野池田地形地質説明書
秋田縣仁賀保 〃 〃
北海道空地 〃 〃
及同附屬地圖各二枚
以上商工省地質調査所
青年徒歩旅行と青年宿舍 厚生省
臺灣山岳樂報 其 會
山幸 阪神山岳會

中島山岳部々報第三號 同 部
京都山岳會々報 同 會
白峰 七、八月號 大阪探險俱樂部
T S K會報 旅の趣味會
熊本アルカウ會々報 九月號 同 會
魚市場山岳會々報 八月號 同 會
De Bergids June 1938
Czechoslovakia 1938
S. T. F. Juni 1938
Die Alpen, Les Alpes-Le Alpi Juni 1938
The Geographical Journal June 1938
Planinski Vestnik 6. 1938
The American Museum of Natural History
Trail and Timberline
The Mountainer
Annuario Ufficiale
La Montagne Juin
Revue Alpin Nv. 316
Appalachia June
S. T. T. Juli
The Prairie Club
Centro Alpinstico Italiano
Sierra Club Bulletin June
The Himalayan Journal 1938
Unione Ligure Escursionisti 7. 8.
The Canadian Alpine Journal 1937

植物辭典 //
Forest Life in India //
The Social Economy of The Hima-
layans //
Himalaya 1936 I 藤島敏男氏
S. A. C. Liederhuhn 1
上信境の山々 中村謙著 同 氏
登山談義 黒田孝雄著 同 氏
山の人達 高橋文太郎著 龍星閣
關西支部來室者報告

月別	會員		議 會		計
	會員	會員外	回数	人員	
6月	45	43	3	34	122
7月	47	44	3	42	133

集會利用登山團體は學聯及びエ
ズルワイスの二回なり。

昭和十三年九月十五日印刷
昭和十三年九月十六日發行

發行兼編輯者 吉澤 一郎
東京市芝區平町(二丁目)ニ
發行所 日本山岳會
電話(四五)一六四九
振替東京四八二九

印刷者 植田 庄助
印刷所 成文堂印刷所